

心血管治療としての理学療法—可能性への挑戦— 循環器治療としての理学療法・運動療法

¹⁾新東京病院, ²⁾豊橋創造大学
内山 覚¹⁾, 田畑 稔²⁾

心血管疾患に対する理学療法の歴史は、長期の安静を必要とする虚血性心疾患の廃用症候群 (deconditioning) の改善として始まり、運動療法を中心とした身体機能の回復を目指す介入として発展してきた。その後虚血性心疾患の治療は再灌流療法の進歩、血管内デバイスの開発など、短期間で虚血を改善する治療へと大きくパラダイムシフトしている。発症早期に虚血を解除することで、心機能は維持され、身体機能の低下は極めて少なくなった。一方で、運動療法の多面的効果が報告され、単に身体機能の回復にとどまらず、血管内皮機能の改善、自律神経の正常化、炎症の改善、不整脈の減少などが示されている。これらの効果は心疾患患者に生じた deconditioning の改善という意味合いよりも、運動療法が心疾患の発症そのものや再発の予防に有効であることを示している。

また、対象とする疾患は虚血性心疾患のみならず、心臓血管外科手術、心不全、大血管疾患、末梢動脈疾患へと適応を拡大し、教育

やカウンセリングを含む包括的介入を多職種で行う時代になってきている。今後は、治療薬との相互作用、TAVIやCRTD、VADなどの新たなデバイスとの関係、心移植などへの適応拡大が予想され、さらなる発展が期待されている。

本シンポジウムでは、日本循環器学会から代田浩之先生をお迎えし、医師の立場で循環器領域の運動療法の変遷を総括していただき、理学療法士に今後の課題をご示唆いただきます。また、渡辺敏先生 (日本心管理理学療法学会代表幹事)、河野祐二先生 (藤田保健衛生大学坂文種報徳會病院)、松永篤彦先生 (北里大学医療衛生学部) の3名の理学療法士に登壇していただき、実践における「治療としての理学療法・運動療法」について解説して頂きます。

50回の記念学会にふさわしく、過去の歴史と未来への展望を総括したシンポジウムを展開しますのでぜひご参加下さい。

運動器理学療法のパラダイムシフト—新たなる可能性への挑戦—

1 運動器理学療法における科学のこれまでとこれから

弘前大学大学院保健学研究科 対馬 栄輝

科学とはおよそ、科学的方法に基づいて得られた知識あるいは学問と解釈できる。科学的方法とは、ある対象について一定の研究方法に基づいた観察・実験で得られた知見から、体系的に構築された一般法則を見出し、一定の基準を満たした状態で理論的裏付けを行い、その正しさを立証する過程をさす。ただし、これは、その時代での暫定的な概念的定義である。

今日までの理学療法は、全てではないにしろ、とうてい科学的とは考えられないわけではあるまい。そもそも科学的とは証拠への依存、仮説と理論の使用、用いられる論理において共通している (AAAS, 1989)。つまり、専門家・研究者どうしに容認される測定・評価、それを裏付ける理論は時間経過と共に変遷するからである。天動説を基にして誤りを判定する歴史も存在していた。

いま、理学療法の科学的裏付けを意識するあまり、概念的定義か

ら操作的定義を目指し、客観性と可量性を追求することこそ高尚なものとして意識されている感がある。理学療法の科学的検証として、厳密に環境が統制された条件下で行われる実験研究に基盤を置く立場は大切であるが、理学療法で対象とするものとは異なる場合は多い。逆に理論に裏付けさえされていれば科学的と考える誤解もある。全てを否定するつもりはなく、理学療法の学問確立のために方向性を見失うべきではないということである。例えば根拠に基づく理学療法 (EBPT) の考え方は、あくまで“科学的根拠”では無いことにも注意すべきである。本質は何かを見極める知識と知恵が要されているのである。

前置きは長くなったが重要な事項である。運動器理学療法に特化して、いままでの問題とは何か? これから必要とされているものは何かを提案し、共に考える場を提供したい。